

令和6年1月16日

令和5年度 世田谷区立桜町小学校 学校自己評価報告書

桜咲く深緑の学び舎
世田谷区立桜町小学校
校長 中村 泰之

1 本校の教育目標及び経営方針

◇教育目標

- 考え深い子ども 自ら学び、よく考え判断し、協働することで学びを深める子ども
- やさしい子ども 多様性を認め、人や自然を敬い、助け合う子ども
- たくましい子ども 心身共にたくましく、やり遂げようとする子ども

◇学校経営方針

経営方針「子どもが自ら学び、内から育つ学校～子ども一人ひとりが学習を自分事として捉え、学びがいや喜びを感じ、よりよく育つ学校～」

全ての教育活動の根底にある理念は「はじめに子どもありき」である。「はじめに子どもありき」とは、子どもの好き勝手にさせることでもやる気の出ない子どもを放っておくことでもない。子どもが何を感じ考え、どうしたいのか、何に困っているのか、どのように学んでいくのかという一人ひとりの事実を明らかにして、それに基づいて教育活動を行っていくことである。

「子どもはよくなるうとしている」「子どもは本来能動的な学習者である」という「子ども観」に立ち、「学習の主体者は子どもである」「子どもの事実立つ」という「授業観」をもって、子どもと共に創る授業を展開していく。

これからは、ウェルビーイング（インクルーシブ教育を含む）の視点を持ち、「みんなも幸せ、自分も幸せ」という幸せや生きがいの実現に向けた教育が必要とされている。そのためにも、学校、家庭、地域がそれぞれの役割を果たし、共に連携して子どもたちのためによりよい教育活動を行うチーム学校としての機能が必要である（学校運営委員会、学校関係者評価委員会、学校支援地域本部との連携等）。

本年度より取り組む「自ら学び、内から育つ子ども～教科横断的なカリキュラム・マネジメントによるせたがや探究的な学びの実現を通して」の研究を通して子どもが主体的に活動する生活科・総合的な学習の時間の単元開発と関連する教科におけるせたがや探究的な学びを具現化する。

◇今年度の重点目標

- 全ての教育活動における探究的な学びを通して、学習を自分事として捉え主体的に学び、高い思考力・判断力・表現力、必要な知識・技能を身に付け、共感・協働する子どもを育てる。
－確かな学力の育成－
- 非認知能力を育成することを通して自尊心をはぐくみ、多様性を認め自他を尊敬することのできる子どもを育てる。
－豊かな人間性の育成－
- 体力の向上を図り、自らの気力を充実させてやり遂げようとする子どもを育てる。
－健やかな身体の育成－

2 学校の概要

校長名 中村 泰之

学級数 通常の学級 27学級 特別支援学級 5学級 計32学級

児童数 933名（令和6年1月16日現在）

学校の特色 地域・家庭と連携した教育活動（ねぶたの学習等）、挨拶運動、にじいろ班（縦割り班）活動、通常の学級と特別支援学級の交流等、全教育活動での探究的な学びの実現を目指し、子ども主体の学び合いの活動を重視している。今年度より、「自ら学び、内から育つ子ども～教科横断的なカリキュラム・マネジメントによるせたがや探究的な学びの実現を通して」の研究を通して子どもが主体的に活動する生活科・総合的な学習の時間の単元開発を行い、生活科・総合的な学習の時間共に、子どもが夢中になって探究する学びを具現化している。

3 「重点目標」についての評価

◇今年度の数値目標及び改善策

重点目標1	重点目標	全ての教育活動における探究的な学びを通して、学習を自分事として捉え主体的に学び、高い思考力・判断力・表現力、必要な知識・技能を身に付け、共感・協働する子どもを育てる。 －確かな学力の育成－
	数値による指標	「すすんで自分の考えを伝えようとしている」と自己評価できる児童を85%以上にする。 「自分の生き方や将来のことについて、考える授業がある」と答える児童を（5・6年）85%以上にする。
	改善方策	○生活科・総合的な学習の時間を軸としたカリキュラム・マネジメントを実施し、各教科の学びにおいて、児童が自ら動き出す探究的な学びを実現する。 ○発達段階に応じた反応ワードの活用、目的の共通理解を徹底し、児童が自分の考えを自信をもって発信できる人間関係づくりを全学級で行う。 ○徹底された明確な学習ルールのもと、主体的・対話的で深い学びを意識した授業改善を行う。児童がめあてを立て、そのめあてを意識し振り返りながら学び、学んだことを振り返る授業を増やす。またそのための校内OJTを計画的に実施する。
重点目標2	重点目標	非認知能力を育成することを通して自尊心をはぐくみ、多様性を認め自他を尊敬することのできる子どもを育てる。 －豊かな人間性の育成－
	数値による指標	「自分には良いところがある」と自己評価できる児童の割合を90%以上にする。 「誰かの役に立っていると思うことがある」と自己評価できる児童（5・6年）の割合を80%以上にする。
	改善方策	○にじいろ班活動などの特別活動や行事などでは、役割を意識した明確な目標をもって参加できるようにし、振り返りもその目標に基づいて行えるように全教員が共通認識をもって指導する。 ○キャリアパスポートを教員と児童が双方向で活用することで、児童が自分の目標と成長、課題を自覚して学び続けようという意欲をもてるようにする。 ○自分の住む地域の人材、教材、様々な職業の大人との関わりを生かした体験的な学びを重視する。学習を自分事として捉え探究的に学ぶ中で、自分の将来をイメージし、なりたい自分に近づく力を身に付けられるようにする。
重点目標3	重点目標	体力の向上を図り、自らの気力を充実させてやり遂げようとする子どもを育てる。 －健やかな身体の育成－
	数値による指標	「体育の授業や外遊びなどで体を動かすことが楽しい」 「マナーを守り、よくかんで落ち着いて給食を食べている」と自己評価できる児童の割合を90%以上にする。
	改善方策	○体力向上月間の取組について、今年度の内容を精査し継続することで、自分の健康を意識して運動に進んで取り組もうとする意欲を高める。 ○体育委員会児童を中心に、児童による提案などを積極的に取り上げ、大縄などの取組を充実させ、運動が好きな児童が増えるようにする。 ○休み時間は、安全に配慮しながら、外での運動を推奨し、運動の機会を確保する。 ○給食スタンダードを必要に応じて見直ししながら、給食時間における食育の充実を図る。

◇成果と今後の取組

重点目標1について

○「『すすんで自分の考えを伝えようとしている』と自己評価できる児童を85%以上にする。」については、児童アンケート項目「授業では、すすんで自分の考えを伝えようとしている。（手を挙げて発言・話し合う・書き表す など）」についての結果を見ると1～4年生については90%を超えているが、5・6年生については85%に満たなかった。やはり高学年になるにつれて自ら発信する意欲が下がってしまっているという現状がある。「発言する」ということのみには価値を置くのではなく、ロイロノート等に意見を書き出し、それを共有することで自分の意見や考えを伝えていることになるのだということを通理理解していく。一方で「授業では、考えたことを話し合ったり発表し合ったりする機会がある」（5・6年生）については90%を超えているので、学び合いの場は十分に創出できており、それを児童も実感していることがわかる。今後も、共感・協働の学びにおいて、発言は得意ではないが静かに考えている児童の思いや考えを共有することの重要性を浸透させていく。

○「『自分の生き方や将来のことについて、考える授業がある』と答える児童を（5・6年）85%以上にする。」については、65.5%と大きく下回った。これは、総合的な学習の時間の単元開発を行い、児童が夢中になって探究する活動を創出することはできたが、そのことが「じぶんの生き方や将来について考える」ということに項目と児童の意識が結びついていないということが考えられる。職業調べや職場体験等の直接的なキャリアに関わる教育活動だけが、キャリア教育ではないことを折に触れ伝えていく必要がある。我々教員が、キャリア教育の4つの視点を意識し、全ての教育活動を捉えなおし、キャリアパスポート等を活用して児童に働きかけていくことが必要である。

重点目標2について

○「『自分には良いところがある』と自己評価できる児童の割合を90%以上にする。」については、1～4年生は90%を超え、5年生も88%と90%近くになっている。高学年になるにつれ、より客観的に自分を見るようになっていたり、自己批判をするようになっていたりすることは発達段階の特徴ともいえる。しかし、心理的安全の高い学級経営を心がけ、子ども同士の共感・協働の場面を学びの必然に応じて創出していくことで、自己有用感や自己肯定感がさらに高まっていくと考えられる。

○「『誰かの役に立っていると思うことがある』と自己評価できる児童（5・6年）の割合を80%以上にする。」については、80.3%で目標は超えた。これについては、にじいろ班、桜町タイムのあいさつ、クラブや委員会活動等において、高学年が活躍できる場所が多様にあること、機会を捉え教職員から、認め励ます言葉がけが行われていることに起因すると思われる。下学年が上学年をあこがれをもって見ることができるような学校文化ができているので高学年の児童が意識をもって行動できるよう、この雰囲気や大事にしていきたい。また、総合的な学習の時間において、地域での体験活動、探究活動が増え、地域の方々から感謝される場面が増えていることは、今後子どもの意識による影響を及ぼしていくものと考えられる。

重点目標3について

○「『体育の授業や外遊びなどで体を動かすことが楽しい』と「マナーを守り、よくかんで落ち着いて給食を食べている」については「わたしは、体力の向上や健康な生活に取り組んでいる」という項目に集約したが、85%であった。90%には至らなかったが、おおむね意識できていると考えている。体育の授業は体育主任が中心に用具の充実及び指導方法の共有等が継続的に行われている。生活指導部では、外遊びの推奨を呼び掛けている。今年度は2学期間給食室改修工事のため、お弁当だったが、3学期に給食が再開し、子どもたちは喜びよく食べている。マナー等に関しても大変よいと捉えている。

4 「安全・安心な学校づくり」についての評価

児童が安全に登校し、安全に下校することは、すべての教育活動の大前提である。防災・防犯教育、安全指導、避難訓練等を通して、児童の危険予知能力、危険を回避する能力を身に付けることを目指し、生活指導部を中心にして取り組んできた。

「安全に気を付けて登下校や生活をしている」と自己評価できる児童の割合は、全学年とも90%を超えている。また、地域・学校関係者のアンケートでは、「通学している子どもたちは、交通ルールなどを守っている」の肯定的回答について、85.8%と高い評価をいただいた。学校の取組が児童に浸透し、変容が見られていると捉えている。保護者アンケートにおいても「本校は、安全な学校づくりをすすめている。」の肯定的評価は89.9%と高い。

今年度も、「いのちを大切に作る日」の指導を含め、交通安全指導に重点を置き、年間を通してPTAと連携しての交通(自転車)安全教室や通学路安全マップ(PTA作成)を使用しての安全指導等を実施した。また、生活指導部を中心に、月に一度、下校時の見守りを行う週間の設定し安全教育を徹底している。

5 「地域との連携・協働による教育」についての評価

今年度も、「地域と共に歩む学校」として、学校運営委員会や学校支援地域本部、学校支援コーディネーターと共に、地域と連携し、地域に根ざした教育活動を行った。

地域の方の独自評価項目において、経営方針については概ね評価いただいた。さらに、地域と学校との連携の可能性について探っていく必要がある。学校からの情報発信について、さらに様々な機会を捉えて行うことが望まれている。

安全な学校づくりについては、地域では100%、保護者はほぼ90%の評価をいただいた。さらに子どもたちのために安全な学校づくりを徹底していきたい。

今年度、かなり活動が充実したが、生活科や総合的な学習の時間を中心に、地域に根差した教育活動をさらに具現化していきたい。地域との連携を深め、学びの場を学校の外へ創っていくことで子どもたちが必然を感じながら生き生きと探究的に学ぶことにつながると信じている。